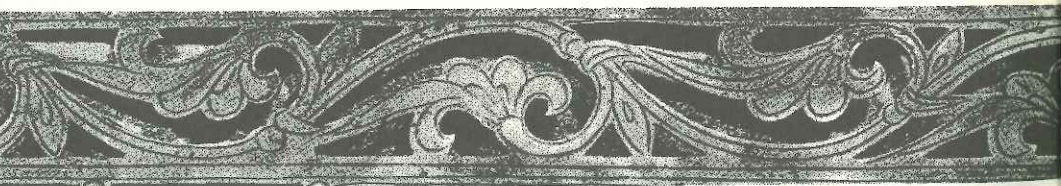


ともしび

東 本 願 寺

上巻目次

第一章	限りなきあゆみ	11
	努力	16
	努力	17
	尊いのは足の裏である	19
	意志の鍛錬	20
	目標達成のために燃える	23
第二章	悩みのなから	29
	宗教的苦悩	36
	悩	37
	念	38
	出	40
	家	40
	仏	38
第三章	欲望のさまざま	47
	一本のねぎ	53
	要求と欲求	55



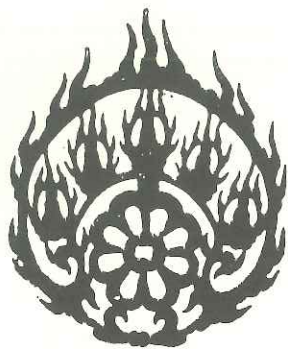
下巻目次

第一章	出会いの喜び	119
	めぐりあい	128
	親鸞さまとのであい	130
第二章	選びに立って	137
	道はいつもひらかれている	146
	将来への不安	148
	目標のない人生計画	150
第三章	知恩に思う	155
	念ずれば花ひらく	163
	母のこと	164

第四章	いのちの尊さ	65
	いのち	72
	わが命のために人の命を	75
	苦海浄土	77
第五章	愛を求めて	83
	いのちを愛する人	90
	ひとの不幸をともしにかなしむ	91
	夜のくすのき	94
第六章	平等へ向って	101
	洗心	107
	三好君	109
	水平社宣言	111

	砂漠での遭難	57
	シジミ	60

灯



— 上 —

真宗大谷派学校連合会編

第四章 歴史とともに……………171

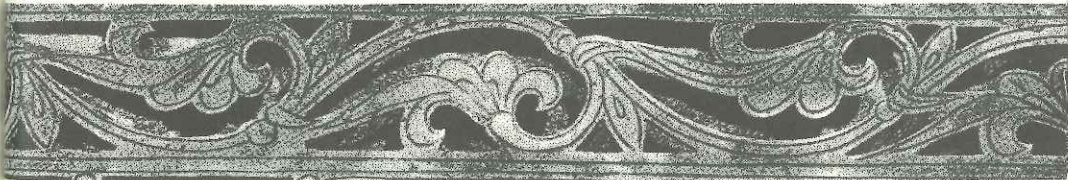
ヒトとその進化……………180
過ぎ行かぬ時間……………182

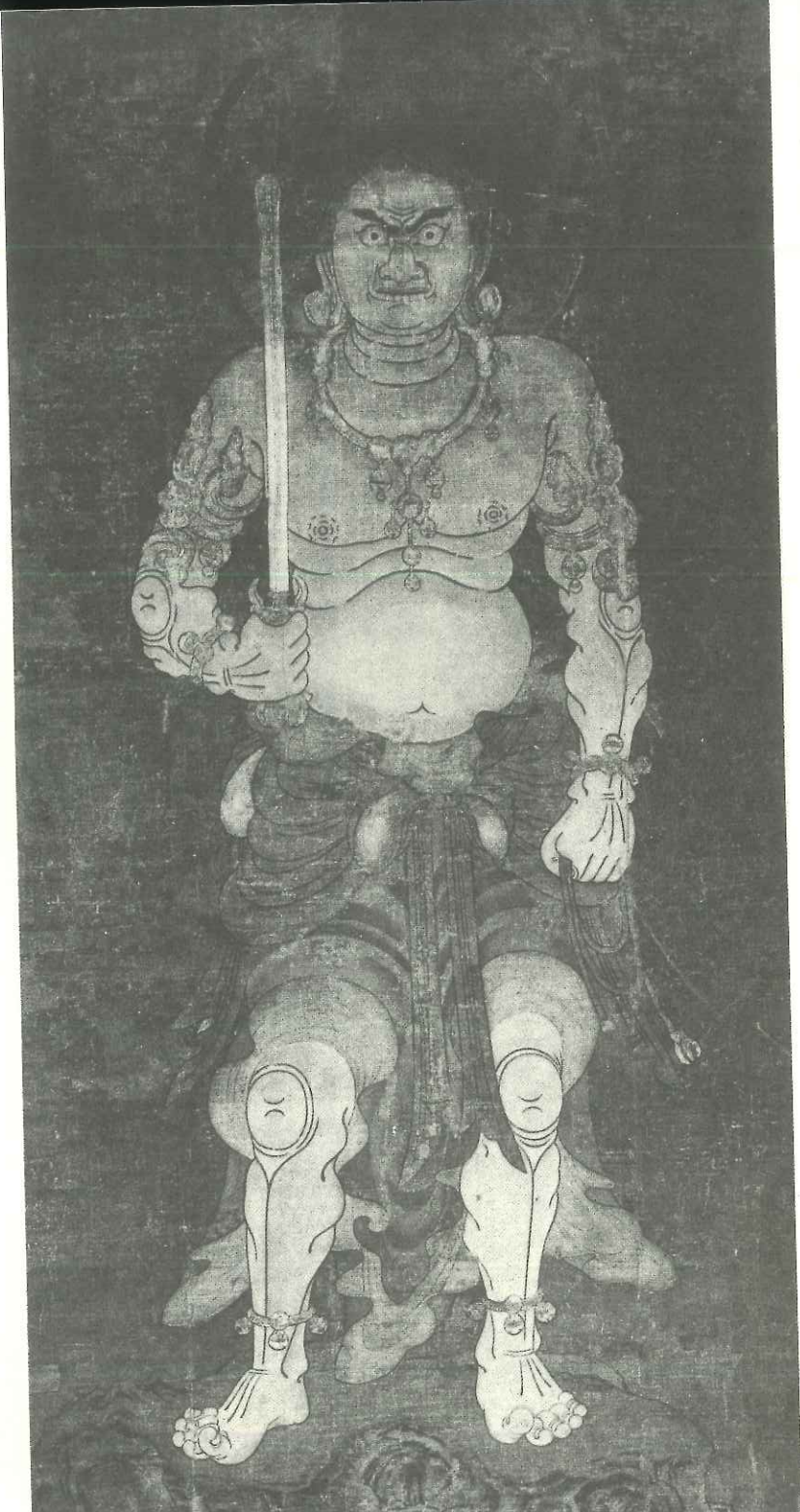
第五章 社会とのつながり……………189

虫 けら……………198
身勝手は赤ん坊のころ……………200
シンホニー的的人生観……………202

第六章 願いに生きる……………207

希^望 い……………216
雨ニモマケズ……………218
「宗谷挽歌」より……………220





—不動明王（黃不動）—
鎌倉時代
京都曼殊院藏

第一章 限りなきあゆみ

春。草も木も萌え出す季節。道の片隅に雑草のあざやかな緑を発見して驚くことがある。垣根越しの庭木の梢もこんもりとふくらんでいる。それらを見て、私たちはほのぼのとした命の息吹を感じる。

長く厳しい冬。身も心も凍りついてしまいかと思われるほど寒さが激しくとも、それに耐えて、草も木もいまよみがえる。陽光にその喜びを顕しているように見えるのはそのためだろう。名も知らぬ草木であっても、己のすべてを晒すようにして命の確かさを証している。その姿は、輝くばかりに美しい。

なぜなら、十三歳にしてこの世に生きることのつらさを思い知らされた、という古人（明恵上人）の述懐をまつまでもなく、私たちも、すでに十分といえるほど長く厳しかった冬の季節を通りすぎてき

たからである。よく途中で挫折してしまわなかつたものだ。温室のような状態のなかで居眠りをしてきて、少しも寒くはなかつた人もいるであろうが、あの寒さに痛めつけられた傷口が、いまもなおうずく人もいるかもしれない。

だが、とにもかくにも私たちはいま、厳寒の季節を耐え抜いて春の日をあびているのだ。つまり大人の世界への第一歩ともいえる新しい生活を始めることになったのである。そのときに改めて、人は一体なにを目指してあゆみを進めるべきか、どのように生きることが最も意味のある生き方になるのか、希望に満ちたあゆみを実現する方法とはどのようなことなのか、それらの問題を心して考えてみてもいいのではなからうか。

うか。

確かな足どりをもって進むことのできる、本当の生き方とはどのようなものであろうか。

そこでまず、なにが本当であり、意義があるとはどういうことで、充実するとはどうなることなのかについて考えてみよう。いずれも大変むずかしい。それだけに、意義のある生き方は容易に実現しないかもしれない。だがあきらめるのは早い。私たちにも納得できる方法はあると思う。充実した人生を見事に生き抜いた人はこれまでもたくさんいるのだから。

ではそういう人生とはどのようなものか。いま、試みにおおよその見当をつけるとすれば、多分それは豊かで実質があり、活気に満ちていて、常に若々しいことだといえよう。

私たちの生活、これまで自分がたどってきたあゆみを反省してみると、どこかにうそがあり、薄っぺらで、不完全でしかも中味が空っぽであったといえないだろうか。しかし、真実の生き方とは、ちやうどそれらとは反対のものと考えられる。

たとえば、太陽は光の源泉である。しかし私たちは自分の目で、太陽そのものを見ることはできない。ただ、その光を受けているものを見て、その明るさを知るだけである。それと同じく、「真実」も、それ自体を見るのではない。それと逆の方向にあるものに対応させて、知ればいいといえよう。

だから私たちの現実が、すべて逆になっているとしても、落胆する必要はない。その逆を目指し

バベルの塔

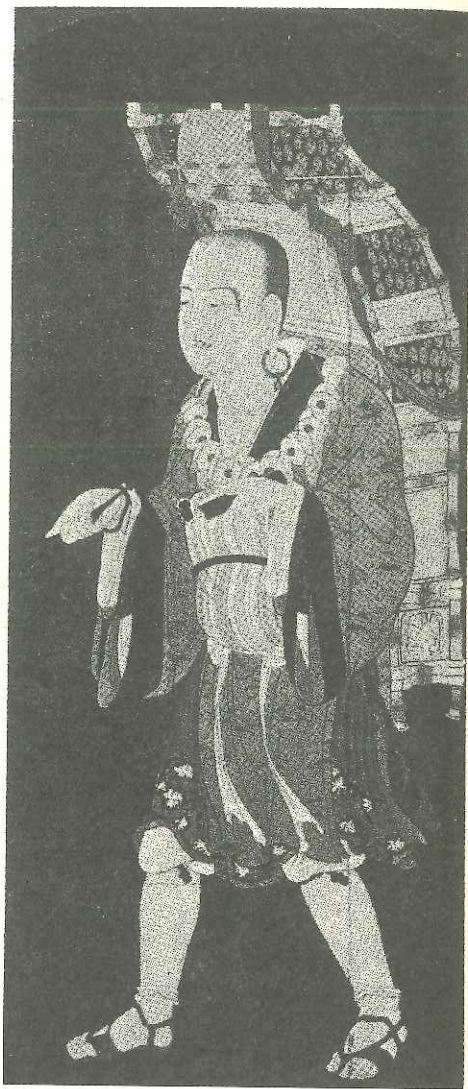
ピーター・ブリューゲル (1528?~1569)



えすればいいのである。確かではないのに確かだと思ったり、信用してはいけないのに信じてしまうことがよくある。他人の張ったレッテルを、なんの根拠もなしにうのみにすることもある。あるいはまた、つらい苦しいことにぶつかって、すぐ逃げ出してしまいうこともある。その状況に耐えきれず、簡単に問題を放棄することもあろう。

しかしだれでも、うそやいつわりに満ちたむなし人生を生きたいとは思っていないし、なぜやりで自分勝手な生き方を続けたくもないだろう。だとすれば、これまでの誤りに多少とも気づくことのできた時点から、新しいあゆみを始めなければならないのだ。素直に自分を見つめて、本当に意義のある人生を実現させたいと願おうではないか。

「生まれた意義と、生きる喜びを見つけよう」という言葉がある。それは、完全に燃焼してなんの未練も残らないような、確かな中味に裏打ちされた生き方を実現させることである。そのためには、日常の具体的なあゆみのなかで、なにか一つのこと目標を定め、そのことに真剣に取り組んでみるのである。勉強でもよいし、スポーツでもよい。あるいは家事の手伝いもある。それらを続けて、努力してみるのである。いやになったら休んでもよいが、やめてしまっただけはいけない。頑張っただけで耐えるのである。そうすれば、そのあゆみのなかで、必ずなにかが見えてくるし、いままで気づかなかったことに気づくはずである。



玄装三蔵行脚図

中国宋時代

それは一見平凡なことかもしれない。しかし平凡だからといって軽んじてはいけない。当り前に見えていることが、人生の深い真実を語っていることはいくらでもある。あゆみが平凡であるというより、そのあゆみのなかで確かめなければならぬ私たちのものを見る目が、曇りすぎているのかもしれないのである。

真実の世界を悟られ、それをこの世の事実の上で確認されたゴータマ・シッタールタ（釈尊）が、やみのなかをさまよっている者たちに語られた最初の言葉は、「甘露の門は開かれたり。耳ある者は聞け。目ある者は見よ」であったと伝えられている。この聖句に一言付け加えるなら、それは「足ある者はあゆめ」であろう。私たちには若い身体と心がある。だから身も心も潤される甘露を求めて、新しい